



# 羅針盤

2015年度 第11号  
都立豊多摩高等学校  
進路図書部

2015（平成27）年11月9日発行

3年生にとっては、入試の皮切り、推薦入試がはじまった。進路先の決まった学友も出始めている。当該の学友は、嬉しい気持ちもあるだろうが、これから本格的な挑戦に立ち向かう仲間たちの心境を配慮して、しかるべき態度をとってほしい。3月の初めまで努力をつづける学友がいる。応援するのはもちろん、君は君で、与えられた時間を実りのあるものにしてほしい。それが充実した大学生活につながるだろう。

2年生は、来年度の選択科目の調査が終わった。よく考えて決断したはずである。いったん立てた志については、とことんこだわってほしい。力がついて志望を上げられると思ったら、〇〇をやってないからチャレンジできない、なんてことがある。

2年生の男子が、指定校推薦について問い合わせに来た。大学名を知りたかったようだ。昨年の一覧表が『進路のしおり』27～35頁に載っている。毎年多少の入れ替わりがある。希望する可能性がある学友は、23～26頁「推薦について」をよく読んで作戦を立てよう。普段の成績や遅刻早退も評価判断の対象になる。長期的に取り組む必要がある。

注意してほしいのは、入試全般と同様、推薦入試も、大学側の都合で制度化されているということだ。彼らは、少しでも優秀な生徒に来てほしいと考える。君たちが、少しでもいい条件の大学に入りたいと思うなら、両者の希望は対立することになる。そうであるとすれば、指定校であれ、公募であれ、推薦入試には、受験生にとって自分を安く売ることになる側面があるのである。推薦入試が、受験生にとって有効に作用するのは、その大学が第一志望の場合である。

## ブライトンから学ぶこと

ラグビーの日本代表が、ワールド杯で南アフリカを破り、グループリーグで3勝1敗の成績を残した。スポーツ史上最大の番狂わせといわれる。が、**五郎丸**選手は「ラグビーに奇跡はありません、必然です」と述べていた。

報道では、準備の周到さが特筆されている。**エディー・ジョーンズ**ヘッドコーチのもと、1日3～4セットの練習、オーストラリアなら2週間で音を上げる合宿を140日続けたという。

猛練習だけではない。南アフリカ戦を裁く審判について、日本人の国際審判に依頼して、癖を分析してもらった。彼には、スクラムを崩す反則を厳しく取る傾向があったのである。そのうえ、審判本人を日本に招き、親善試合の笛を吹いてもらっている。本番では、日本の対策が功を奏し、南アは不用意なペナルティをもらい、最後の逆転につながった。

ゲームプランでは、パスを横につなぐ日本のイメージを逆手にとって、縦に展開することを心がけた。身体の小さな**田中**選手も、前へ前へと突進した。南アは対応に追われた。これも、最重要局面の伏線になる。パスの展開が有効に機能し、逆転トライに結実したのである。

日本は極限的な努力をした。誰も否定できないだろう。

しかし、結果は、35対32の僅差である。感動の記憶をたどれば、さらに薄氷を踏む勝利であった。つまり、日本チームの最大限の努力は、日本が南アを倒すための最低限の努力として結果しているのである。

**最大限の努力が、最低限の努力として評価される。**スポーツの世界で、しばしば目撃する**逆説**である。陸上競技部のM君がインターハイで6位に入った時も、最後の種目で自己新記録を出して食い込んだ。彼の最大限の努力は、全国で6位になるための最低限の努力として報われたことになる。

同じことが、東京都で準優勝したチームにも、1回戦に何とか勝った選手にも言える。運や偶然を排除すれば、そういうことになる。私たちは、運動部の試合や、合唱祭などの行事を通じて、そうい

うロジックと向き合ってきたのである。

運や偶然を前提としなければ、最大限の努力は、最終的な結果に対しての最低限の努力として報われる。

受験勉強も同じである。

私たちは、最低限の努力で最大限の成果を求めがちである。それが効率だと思う。が、論理的には、倒錯している。しかも、最大限の努力が最低限の努力として報われるとき、そこには寸毫も無駄がない。効率的なのである。むしろ、最低限の努力を模索する者に、油断や無駄が忍び寄る。

安心して最大限の努力をすることである。そうすれば、君の努力は最低限の努力として評価されるだろう。最大限の評価を受けるということである。少しも無駄はないということである。

志を高くもちつづけることである。

3年生なら、第一志望を譲らないということである。そろそろ胸突き八丁にさしかかる。精神的にきつい局面もあろうが、今までどおり、たんとと勉強をつづけよう。

下級生も、文・理の区別に拘らず、広い分野で勉強をつづけることである。受験でいえば、国立型を維持することである。今から、可能性を狭めるような選択をしないということである。

入学試験には、スポーツよりも、運や偶然が介在する。不条理な結果がないとは言えない。が、今君ができることは、君にとっての最大限の努力をすることだけである。

その後の報道によれば、**ブライトンコミュニティスタジアム**の逆転トライは、新設されたワールドカップ・ベスト・マッチ・モーメント（最高の瞬間）に選ばれた。選考の対象は、歴代のすべての名場面だったという。

新聞のコラムから

## 英の子、逆転トライに学ぶ

ロンドン中心部から地下鉄で約30分。地区の教会に隣接するオールセインツ小学校は、典型的な英国国教会立の学校の一つだ。全校児童は約200人。ここに、ラグビーW杯を戦う日本代表が一つの変化を起こした。

9月21日朝の全校集会。ブリッジス校長は、日本が南アフリカから歴史的白星を挙げた同19日の試合映像を見せた。終盤、3点を追う日本が反則を得た場面で映像を止める。そして、南アが2度の世界一に輝いた強豪であること、日本は過去の大会で1度しか勝っていないことを説明した。

校長は語りかける。「みんな、彼らはどう思うと思う？」。同点狙いのPGか、勝利のトライを目指すか。子どもたちの大半は「引き分けを狙うんじゃないですか」と答えた。

映像が再生される。日本は勝利を目指し攻め抜いた。ロスタイム、ヘスケスが逆転トライ。盛り上がる児童たちに、校長は再び尋ねた。「日本が勝つのに何が必要だったと思う？」

様々な意見が出た。勇気、諦めない心、チームワーク、練習をしっかりとやること、目を輝かせる子どもたちに、校長は笑った。「そう。それらは全部、みんなに大事にしてもらいたい価値観なんだ」

なぜ、校長は日本戦を話そうと思ったのか。「あの試合があまりにも素晴らしかった」。そして2晩、児童が自ら考えて、何かを心に残せるよう考えた。それが、この朝の集会だった。

ブリッジス校長はいう。「スポーツから人生を学ぶことは沢山ある。何よりスポーツが素晴らしいのは、うまくいかなかった時に取り返すチャンスがあることです」

この集会を経て、オールセインツ小学校には新たにラグビークラブが立ち上がった。学生時代はサッカーに熱中していた校長が指導役だ。10歳のニクヘイル君は「ラグビーはパスもキックもランもできる。選択肢があって面白い」。

日本では4年後にラグビーW杯、5年後に五輪・パラリンピックが開かれる。ラグビー日本代表が歴史に刻んだ大金星は、スポーツの素晴らしさを伝えるかけがえのないツールになる。そして、英国の小学校で起きた小さな変化には、スポーツと教育をつなぐ、大きなヒントが眠っている。

(野村周平、「朝日新聞」2015年10月2日朝刊)

無料で送られてきた入学願書は進路室前の棚に置きます。必要な学友は使ってください。